

科学研究費助成事業 研究成果報告書

令和 2 年 6 月 26 日現在

機関番号：12101

研究種目：挑戦的萌芽研究

研究期間：2016～2019

課題番号：16K13408

研究課題名（和文）地方国公立大学生の「地元志向」の規定要因に関する研究：複数地域間の比較を念頭に

研究課題名（英文）A study on local-orientation of national and public university students in regional areas

研究代表者

寺地 幹人 (Terachi, Mikito)

茨城大学・人文社会科学部・准教授

研究者番号：90636169

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費） 2,400,000 円

研究成果の概要（和文）：本研究は、地方国公立大学の学生の「地元志向」について、現役学生への調査ならびに学生との対話を踏まえ、検証することを目的とした。「地元」概念を理解する際の論点整理から本研究を開始し、既存調査の分析、学生へのサーベイおよびその結果についての学生相互のディスカッションを通じ、「地元」の範囲や広がり形式、「地元」の所与性、個人にとって複数存在するか否かとその場合の条件、などについて検討することが必要だと整理した。

研究成果の学術的意義や社会的意義

本研究の意義は、近年の地方国公立大学の教育に関して、主役である学生を置き去りにしないあり方についての議論に貢献する点にある。地方大学は昨今、地域との連携と地域貢献人材の育成をますます求められているが、社会のリーダーを特に多く輩出する大学の学生自身が、何をもってその地域で生活することを望み、それを選択するのかということが十分に検討されないまま、教育内容や研究事業を地域志向にすることが、大学改革の柱とされる傾向がある。そのため、「地元」概念に対する当事者（学生）の理解の仕方から検討し、実際の学生の地元志向を規定しているであろう複数の要因を総合的に検討する研究が重要だと考えられる。

研究成果の概要（英文）：This study aimed to verify the "local-orientation" of national and public university students in regional areas in light of surveys of current students and a dialogue with them. This study was started by organizing the issues when understanding the concept of "local", and through the analysis of existing surveys, the survey of students and the mutual discussion of the results. Current findings of this study is to show required topics when we examine local-orientation.

研究分野：社会学

キーワード：地元志向

様式 C-19、F-19-1、Z-19（共通）

1. 研究開始当初の背景

研究開始当初、若者の「地元志向」が肯定的・否定的双方の評価から注目されていた。このテーマについて、社会学の学術研究の立場からいくつかの代表的な先行研究（響田竜蔵、阿部真大など）が研究開始当初に存在した。しかしながらそれらは、次の(1)～(3)の点で、限定的な成果であると考えられた。

- (1) 特定の地方の事例を対象としたものであり、人口規模、大都市との距離、地域移動の特性、主要産業・文化などの点で、地域のバリエーションを考慮するとどうなるか明らかではない。
- (2) 響田（2011）や阿部（2013）は非選抜型私立大学の出身者を調査対象としており、政治・産業・文化のリーダーとなりうる層が多く在籍する大学については十分に検討されていない。
- (3) 響田（2011）や阿部（2013）は地方で現在生活している大学既卒者を扱っており、（その地方内で地元就職者と地元外就職者の両方は扱っているものの）都会などの他地域への移動を選択する者との比較で要因を検証できておらず、また、地域を意識する進路選択のプロセスの中にいる者の分析にはなっていない。

よって、以上の(1)～(3)の点を考慮した考察を目指す研究がなされる必要があると考えられた。

また、地方大学は昨今、地域との連携と地域貢献人材の育成をますます求められているが、社会のリーダーを特に多く輩出する大学の学生自身が、何をもってその地域で生活することを望み、それを選択するのかということが十分に検討されないまま、教育内容や研究事業を地域志向にすることが、大学改革の柱とされる傾向がある。そのため、「地元」概念に対する当事者（学生）の理解の仕方から検討し、実際の学生の地元志向を規定しているであろう複数の要因を総合的に検討する研究が重要だと考えられた。

このように、社会学（および他学問や学術研究以外）が扱ってきた「若者の『地元志向』」の限定性に対する研究上の発展の萌芽を探り、またその成果が、地方における大学のあり方についての議論に貢献する可能性をもちうるのではないかと考えた。

2. 研究の目的

以上の背景に基づき、地方国公立大学の学生の「地元志向」を規定する要因について、現役学生に対する調査と対話をもとに、検討することを研究の目的とした。そのためにはまず、「地元」についての概念的な整理を行うことが、目指された。また、大学生自身の概念理解に照らし合わせつつ、「若者の『地元志向』」についての諸先行研究・諸議論が前提とする「地元」の意味を確認したうえで、上記の目的に向けて研究を進めていくことが必要と判断した。

3. 研究の方法

本テーマに関する諸先行研究（研究遂行期間中に逐次刊行されるものも含む）を整理し、「地元志向」および地方の若者をめぐる理論的・実証的な最新の知見を把握しながら研究を進める。若者の「地元志向」にかかわる質問項目を含む既存調査の分析をもとに、本テーマを検討する際の論点を整理する。そして、学生へのサーベイおよびその結果についての学生相互のディスカッションを通じて、「地元志向」およびその規定要因を検討していく。

4. 研究成果

「地元」についての概念的な整理、既存調査の分析をもとにした論点整理についての初発の成果は、2017年に刊行した雑誌論文①にまとめた。この論文では、若者にとっての「地元」について、複数の観点から検討した。第一に、若者自身も「生まれ育った地域」を「地元」として捉えているか（所与としての「地元」）という点について、大部分の若者はそのように認識しているが、そうではない「地元」観、例えば「生まれ育った地域」以外が「地元」になる認識も存在することが、データの分析から示された。これは至極あたりまえの理解のように見受けられるかもしれないが、本テーマをめぐる諸先行研究・諸議論では、こうした「地元」観を予め整理しないまま、話が進められている傾向があるため、データの分析結果をもとに確認しておくことは重要と考えられる。第二に、若者たち自身は具体的にどの範囲を「地元」と捉えているかという点について、「地元」の範囲認識の形式にいくつかのタイプが存在することが、データの分析から示唆された。例えば、生まれ育った小・中学校の学区のみを「地元」と捉えているタイプ、それを含めてより狭い範囲をすべて包含する形で「地元」と捉えているタイプ、その広さにかかわらずある特定の範囲のみを「地元」と捉えているタイプ、などである。すなわち、「地元」の距離的な広さとは別に、認識の形式について取り上げた。第三に、こうしたタイプの規定要因について検討した。これについては、分析結果の解釈を仮説的に示すにとどまった。これらを踏まえつつ、「地元」の外部（若者が「地元」ではないと認識するもの）も視野に入れた研究の可能性や今後の研究課題を、最後に提示した。なお、この成果の一部を、社会・国民にわかりやすく説明する意味もあり、図書①への原稿掲載が予定されている。

こうした「地元」概念および「地元志向」について整理した論点・知見を学生にも提示しつつ、学生へのサーベイおよびその結果についての学生相互のディスカッションも通じ、2018年度には「地元」が個人にとって複数存在するか否かとその場合の条件についても考察を試みた。しかしながら、複数の国公立大生の十分な比較、「地元志向」およびその多面性検討のフォローアップという点で、詳細かつ体系的な成果のまとめの段階には本報告時点で至らなかった。研究開始

当初から本テーマにかかわる地方の若者をめぐる先行研究が数多く出されそのフォローに予想以上に時間を要したこと、COVID-19 拡大の影響や調査協力の実現の問題があったことがその一因である。ただし、前述の論点整理とそれによる「地元」概念や「地元志向」の検討の方向性は本研究によって示された一定の成果であり、地方の若者について地域横断的に調査する近年の研究も踏まえつつ研究を継続し、必要な調査および学会発表・論文化等を通じた成果発信をできるだけ早期に実現することを目指していく。

なお、学会発表①では、「地元志向」のうちの地元愛着や地域移動経験をナショナリズムや排外志向とのかかわりで分析し、都市部の大学定員減の政策はナショナリズムや排外志向の高まりの観点からはリスクではないか、という点をデータの分析から国際的な場で指摘した。学会発表②（COVID-19 拡大の影響により開催が1年延期）では、モビリティや複数地域比較の観点から日本の地方の若者の現状を国際的な場で説明することを予定している。

<文献>

阿部真大，2013，『地方にこもる若者たち』朝日新聞出版。

響田竜蔵，2011，「過剰包摂される地元志向の若者たち——地方大学出身者の比較事例分析」樋口明彦・上村泰裕・平塚真樹編著『若者問題と教育・雇用・社会保障——東アジアと終焉から考える』法政大学出版局，183-212。

雑誌論文①：寺地幹人，2017，「若者にとっての『地元』」『社会科学論集』茨城大学人文学部，63：45-55。

図書①：寺地幹人，2020（刊行予定），「若者と『地元』」木村絵里子・響田竜蔵・牧野智和編著『場所から問う若者文化——ポストアーバン化時代の若者論』晃洋書房，ページ数未定。

学会発表①：Mikito TERACHI，2018，「Local-Orientation in Japanese Youth and Xenophobia / Nationalism」XIX ISA World Congress of Sociology。

学会発表②：Mikito Terachi，2021（報告予定），「Sociological Analysis of Non-urban Youths in Contemporary Japan: Diversity in Non-Urban Areas, Mobility and Trans-Locality」16th International Conference of the European Association for Japanese Studies。

5. 主な発表論文等

〔雑誌論文〕 計1件（うち査読付論文 0件 / うち国際共著 0件 / うちオープンアクセス 1件）

1. 著者名 寺地幹人	4. 巻 63
2. 論文標題 若者にとっての「地元」 青少年研究会2014年調査をもとに	5. 発行年 2017年
3. 雑誌名 茨城大学人文学部紀要 社会科学論集	6. 最初と最後の頁 45-55
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 -

〔学会発表〕 計2件（うち招待講演 0件 / うち国際学会 2件）

1. 発表者名 Mikito TERACHI
2. 発表標題 Local-Orientation in Japanese Youth and Xenophobia / Nationalism
3. 学会等名 XIX ISA World Congress of Sociology（国際学会）
4. 発表年 2018年

1. 発表者名 Mikito Terachi
2. 発表標題 Sociological Analysis of Non-urban Youths in Contemporary Japan: Diversity in Non-Urban Areas, Mobility and Trans-Locality
3. 学会等名 16th International Conference of the European Association for Japanese Studies（国際学会）
4. 発表年 2021年

〔図書〕 計1件

1. 著者名 木村絵里子・轡田竜蔵・牧野智和編著	4. 発行年 2020年
2. 出版社 晃洋書房	5. 総ページ数 -
3. 書名 場所から問う若者文化 ポスターン化時代の若者論	

〔産業財産権〕

〔その他〕

-

6. 研究組織

	氏名 (ローマ字氏名) (研究者番号)	所属研究機関・部局・職 (機関番号)	備考
--	---------------------------	-----------------------	----